

西鶴『武道伝来記』と村岡騒動

——地方談林俳人への「挨拶」の手法——

森 田 雅 也

一、はじめに

西鶴の浮世草子『武道伝来記』〔貞享四（二六八七）年刊〕は、大坂岡田三郎右衛門、江戸万屋清兵衛刊行、八巻八冊、武家の敵討ちを中心とした三十二話からなる短編小説集である。序文に

和朝兵揃への中に、為朝の鉄の弓、武蔵坊が長刀、朝比奈がちからこぶ、景清が眼玉、これらは見ぬ世の事、中古武道の忠義、諸国に高名の敵討、その働き聞き伝へて、筆の林・詞の山、心の海静かに、御松久方の雲に、慶びの舞鶴これを集めぬ。

とあるように、西鶴自らが「中古武道の忠義」「諸国に高名の敵討、その働き聞き伝」えて、書いたとする。

しかし、實際上、古代武士道に対して、最近の武士道の鑑ともなる敵討ちの真実を書き得たかと言うと、当時、幕府、大名、旗本遍く武家に起きた騒動を出版するという行為は慎まなければならないのが常識であり、赤穂事件と『仮名手本忠臣蔵』の例を出すまでもなく、それは西鶴として例外ではない。

さらに真実を書き得たとしても、敵討ちという性格上、敵に巡り会えた例は少なく、巡り会えたとしても首尾良く本懐が遂げられず、返り討ちに遭う場合も少なくない。よしんば、成功したとしても討たれた側、討つ側にも各々劇的な物語が存在し、その悲惨さは容易に想像できる。決して、鬼退治のように痛快な結末がない以上は、浮世草子の題材としてふさわしいかどうかは判断しがたい。

そのような懐疑性によって、近代になって、片岡良一氏がこの作品に、いち早く西鶴の限界説を唱えた⁽¹⁾ことは有名である。それに対し、暉峻康隆氏は武士の敵討ちにおける悲劇性を追究した西鶴の姿勢を評価⁽²⁾し、中村幸彦氏は武士道から逸脱した武家の生きる姿を描いたとして評価⁽³⁾した。いずれにしても、西鶴が世態人情を真骨頂とする浮世草子作家である以上、そこにドラマツルギー的優れた手法を見出そうとしたことに変わりはない。

その武家物の手法を評価する上で求められてきたのが、『武道伝来記』の前年に刊行された『好色五人女』〔貞享三(二六八六)年刊〕同様のモデル小説として可能性である。卷七の二と卷八の一は、寛文十二(二六七二)年二月の江戸・市谷浄瑠璃坂の奥平源八の敵討ち、卷八の一は、寛永十六(二六三九)年七月の京都四条河原における曾我九之助の敵討ち、卷八の四は、寛永十一(二六三四)年十一月の伊賀・上野での渡辺数馬・荒木又右衛門の敵討ちをモデルとしたなどと指摘される⁽⁴⁾が、完全には符合しない。

ところが、『武道伝来記』の翌年に刊行された『武家義理物語』〔六卷六冊。元禄元年(一六八八年)刊〕には、完全な敵討ちのモデルを指摘できる卷二の一「身代破る風の傘」、続く卷二の二「御堂の太鼓打つたり敵」がある。卷二の一では徳島藩士の食客、本部実右衛門が、ある雨風の強い日、徳島城下の新橋で藩士島川太兵衛と傘が当たったことで口論となり、斬り合いとなり討ち取られ、島川太兵衛を実右衛門の甥たちが追跡するが、太兵衛も医者「本立」と名を変え、城下を立ち去り大坂へと上った経緯が書かれている。卷二の二では、その大坂に潜伏する「本立」

こと鳥川太兵衛を追っ手の甥たちが御堂前で見つけ、見事本懐を遂げるという話である。この二話は貞享四（一六八七）年六月三日に起こった、大坂南御堂前での敵討ち事件を扱う⁵⁾「際物」として、誰もが認めるモデル小説となっている。

しかし、『武家義理物語』に際物的敵討ちがモデルとなっている話はこれ以外にはなく、他は百年、それ以前の武家の話をあげており、むしろ、『武道伝来記』の序にある「和朝兵揃への中に、為朝の鉄の弓、武蔵坊が長刀、朝比奈がちからこぶ、景清が眼玉、これらは見ぬ世の事」さながらなのである。

ひるがえって、『武道伝来記』こそ序に「諸国に高名の敵討、その働き聞き伝へて」とあるように現代版武道話を企図しているのである。それはどのような手法を指しているのだろうか。以下『武道伝来記』巻三の二「按摩とらする化物屋敷」から分析したい。

二、江島為信と「梶田奥右衛門」

『武道伝来記』は、副題に「諸国敵討」とあるように、北は奥州福島、南は薩摩に及ぶ広範な地域が敵討ちの舞台として登場することからも諸国話としての要素は濃い。さらに『武道伝来記』の一話ごとにおいても「江戸のかたきを長崎が討つ」は後世の語であるが、敵討ちという性格上、事件の後、国元を去った仇を追い求めて、討ち手の側も諸国に旅に出るといふ展開となっている。巻三の二「按摩とらする化物屋敷」も多分に漏れない。その梗概は以下である。

豊後府内（大分市）にある化物屋敷を新参者の軍学者梶田奥右衛門が殿から拝領し、毎夜の怪異にも負けず、化物を退治して

しまう。城下に武勇の名を馳せた奥右衛門であったが、郷里の但馬から早飛脚があり、兄が不慮の喧嘩で討たれ、敵「戸塚宇右衛門」は四国へ逐電した旨の知らせが届く。奥右衛門はさっそく、殿に敵討ちの許可を得て、伊予松山へと舟で乗りつづける。その地を隠れ家として、数年、松山で兵法を教えながら、仇を土佐に、讃岐に探し求め、ようやく、今治に潜伏しているとの情報を得る。その地に赴き、仇を追い詰めるものの、奥右衛門は発病し、取り逃がしてしまう。その後、探索の末、仇が但馬出石の寺に潜伏しているとの情報を得、激闘の末、ようやく見事、本懐を果たし、豊後に帰り再び武名をあげた。

この豊後の「梶田奥右衛門」が伊予松山まで敵討ちに向いたことについて、すでに論者森田は、「愛媛近世文学研究会」において「江島為信と『武道伝来記』〜四国談林俳諧と西鶴との交流〜」と題して発表し、この「梶田奥右衛門」のモデルが談林俳人「江島為信」（一六三五〜一六九五）であることを報告し、論文としている⁽⁶⁾ので詳述は避けるが、江島為信を『武道伝来記』の「梶田奥右衛門」のモデルとする理由を簡略に押さえておきたい。

江島為信とは、西鶴（一六四二〜一六九三）と同時期に活躍していた仮名草子作家であり、談林俳人であり、浪人の後、兵法者となり、伊予今治藩士として抱えられたという数奇な人生を辿っている。

仮名草子・俳諧作者。本名江島長左衛門為信。一時、海老原三左衛門。俳号、松風軒・山水。日向国飫肥藩士江島為頼の三男で、伊予国今治藩士。宗因門。明暦元（一六五五）年、飫肥を出奔して京などを転々とし、「日州漂泊野人」の仮号で『身の鏡』『理非鑑』などの仮名草子を刊行。寛文八（一六六八）年、今治藩主松平定房に仕官、昇進を重ねて祿五百石の藩老となる。仕官後の江戸在住の時期に宗因に批点を請うた独吟『十百韻』（延宝七）を刊行した。

『俳文学大辞典』（角川書店）

その江島為信と西鶴との接点は、明らかな事象だけで以下の六点があげられる。

① 江島為信は、西鶴の俳諧の師である西山宗因に師事。西鶴と同門の談林派である。

② 江島為信は、「松風軒」「山水」と名乗っているが、西鶴の軒号にも「松風軒」がある。

③ 江島為信は、江戸留守居役の延宝七（一六七九）年、西山宗因の批点を得て『山水十百韻』を刊行している。宗因の判詞によれば、松意ら江戸談林派と新しみを競っていたという。

④ 江島為信は、西鶴が、延宝八（一六八〇）年五月七日、大坂生玉社南坊に聴衆数千人を集め、矢数俳諧として興行した独吟一日四千句に参加し、発句を詠んでいる（興行は延宝九年『西鶴大矢数』として刊行）。

卷二 「飛や蛩 宇治瀬田ならず 大矢数 江島山水」

「芝は扇の拍子に懸つて 西鶴」

⑤ 江島為信は、『身の鏡』『万治二（一六五九）年刊』『理非鑑』『寛文四（一六六四）年刊』があり、仮名草子の作家としては西鶴の先覚にあたる。

⑥ 江島為信は伊予今治にあつて、西鶴の談林俳人仲間、岡西惟中や大淀三千風の訪問を受けている。

⑤の仮名草子作家としての直接的交流を指摘することは難しいかもしれないが、西鶴浮世草子への影響は考えられる。何よりも談林俳壇において、西鶴と同じく西山宗因に師事し、同座していた事実は二人の身分を越えた強い絆を感じずにいられない。もちろん、江島為信の長い全国流浪の身の体験は、語れば、敵討ちの話を含め、西鶴の有力な情報源となり得たはずである。

さて、卷三の二「按摩とらする化物屋敷」「梶田奥右衛門」とモデルとしての江島為信の設定に関しては以下の六点があげられる。

1. ともに流浪の末に高禄で仕官していること。

2. ともに「軍者」であり、「武芸いづれ愚かもなし」であること。
3. 「日向国」と「豊後の府内」は日向道で結ばれ、伊予街道、伊予灘で伊予国と結ばれていること。
4. 江島為信の通称「長左衛門」に対し、主人公「奥右衛門」、仇の名も「宇右衛門」と似た名前であり、原文において数度、「右」と「左」を誤記するほど紛らわしい名前を使用していること。
5. ともに新参者にもかかわらず主君からの信頼が篤いこと。

6. 江島為信は太田道灌持資流の兵学者で、召し抱えられた今治藩では、延宝四（二六七六）年鉄砲隊を重視した兵式隊制を編成した（『愛媛県史』）ことが知られているが、「太田道灌」は、江戸城、岩槻城、河越城を築城した城郭研究の第一人者である。主人公「奥右衛門」は、松山城下で「城取の大事（城の構築法）」を「伝授」したとする。江島為信は浪人時代は江戸で軍法を論じており、仕官してからは今治で講じている

先学にこの二人の関係を論じた例を未見であるが、ここまで「江島為信」を当て込んで巻三の二「按摩とらする化物屋敷」「梶田奥右衛門」を形象化したことは、単なるモデル小説ではなく、伊予俳人「江島為信」への西鶴からの俳諧で言う「挨拶」ではないかというのが、この章前半の分析である。

三、「梶田奥右衛門」武勇譚から敵討ち事件へ

『武道伝来記』巻三の二「按摩とらする化物屋敷」の後半は、「梶田奥右衛門」の但馬出石での敵討ちが中心となっている。しかし、急に話が変わるのではなく、「梶田奥右衛門」の豊後においての化物退治の武勇、剛の者の者という人物像が、四国において追跡行するうちに徐々にその印象が薄らいでゆくように形象化されているのがわかる。本来、豊後を出るときは殿の覚えもめでたく、

(前略) すぐに御前に出で、段々敵討ちたき願ひ、御承引あそばされ、「もつとも兄の儀なれば、堪忍なるまじ首尾よく討つて、追つ付け帰參の時分は、先地一倍の御加増」と、有難き御上意をうけ、翌日豊後を立ち、先ず伊予舟に取り乗せて、松山に上がりぬ。

と、仇を求めて颯爽と四国松山に到着する。ところが松山の生活は、

この許に忍び居て、土佐にも行き、讃岐にも越え、様々身をやつし、敵のあり家を尋ねしに、深く身を隠して知れがたく、二年あまり心を尽くせしかひぞなく、むなしき年月をここにて送る無念なり。

と、四国中を手を変え品を変え「身をやつし」て追跡しても発見できぬ苛立ちと、精神的に追い込まれた疲労困憊の姿が看取できる。

ところが恋におちる。松山を拠点に「城取りの大事を、各々伝授」して生活する中で、弟子に「美少人、今年十七」「大津兵之助」という「若衆」がおり、「奥右衛門と深く成」っていく。奥右衛門はこの大津兵之助に「心中残さず」「敵討つ子細」を打ち明けることで、敵討ちの心強い助太刀を得るとともに、彼は仇「戸塚宇右衛門」の面体を見知っているという幸運を得て勇み立つ。

そんなある日、ついに宇右衛門が「今治」に居るとの情報を得るが、奥右衛門が急病となり、重篤となる。奥右衛門は兵之助の献身的な看病により、九死に一生を得るが、兵之助一人で、「今治」の大浜八幡宮への病氣快癒のお礼参りの途次、宇右衛門一行と遭遇、兵之助一人で、宇右衛門らと切り結び、宇右衛門の左腕を斬り落とすが、兵之助も左の手首を切り落とされ、宇右衛門はその隙に一行に守られ、舟でいずこかに逃げて行ってしまふ。したがって、奥右衛門は千載一遇の敵討ちの場で何の役にも立たなかつたという拍子抜けの失態を犯してしまう。

一方、兵之助は、宇右衛門を取り逃がしたことを恥じ、切腹して果てることを考えるが、ひとまず、病中の奥右衛門に報告することを控え、自宅に籠もり傷の養生に専念していた。そこに快方に向かった奥右衛門が兵之助に会いに来て、積もる話に涙しながら、睦みの中で手首がないことに気づき、宇右衛門との遭遇と戦い様を知り、再び涙するが、ここはこの場面は哀感の場であるが、かき口説く様は臨場感があり、親子のような年齢差のある恋の道に滑稽さすら感じてしまう。そこにはもはや武勇の「梶田奥右衛門」はない。

しかし、兵之助の方は改めて奥右衛門の助太刀を誓い、主君に許可を得、奥右衛門とともに中国地方を探索中、但馬出石のある寺（久松落月庵）とあるが不明）で宇右衛門が潜伏することをつきとめる。この二人の旅姿はすでに主体が若い兵之助に移り、二人が一体化して、一つの敵討ちという目的に向かって行動をとっている。

出石の寺が嚴戒下にあるため、寺から一里離れた「浅田村」（不明）で奥右衛門と兵之助は幾日か機会を待ち、激闘の末ようやく本懐を遂げるのである。ここで二人は別行動をとり、奥右衛門は、豊後に帰り、「二度その名をあげて」「人の鑑」「世語り」となり、伊予に戻った兵之助も主君から「一代無役、先地六百石」となり、その後も二人の念友関係は続き、誉れとなったという、最後は成功した敵討ち話らしく華々しく終わっている。

そうなると、『武道伝来記』巻三の二は一話ながら、前半と後半が主役の違う二話の連環とも言える。「連環」という語を用いたように、つなぎ目がある。それが、二人が四国を旅立つ所にある。

したがって後半において、「江島為信」の関係を論ずる必要はなさそうである。

四、村岡騒動と『武道伝来記』巻三の二

そのように見たとき、難航する敵討ち話はどこか現実味がありすぎ、実際の事件の影を求めてしまう。

敵討ちの舞台は、但馬「入佐山」すなわち、出石の話とされている。西鶴と「入佐山」と言えば、『好色一代男』世之介の父夢介の出身地となるが、当時の人々にとって出石の印象は、あの『応仁の乱』の首魁、山名持豊の本拠地出石此隅山城のあった地であり、西軍旗揚げの拠点である。戦国期から徳川の治世となっても「山名」の知名度は大きかった筈である。その山名氏の末裔は、出石に近い但馬村岡山名藩として存続し、明治まで続くことになる。西鶴の頃、その村岡藩で大きな騒動となる敵討ちがあった。

延宝元（一六七三）年、村岡山名藩（但馬七美郡）の江戸屋敷で主君山名矩豊愛蔵の小柄が紛失した。詮索の途中に、矩豊小姓「北条造酒助」の仕業との噂が広まった。噂を広げた人物は、造酒助の朋輩「河野九十郎」らしかったが、詮索の結果、真犯人は江戸市中から藩邸に通ってきた武芸師範役「清水半左衛門」であると判明し、一件は落着した。

ところが噂を立てられた造酒助は激怒し、九十郎に抗議し、ついに藩邸で殺害に及んでしまう。すぐさま造酒助が、自ら事の顛末を藩の大目付「浅田重郎兵衛」と目付「池田七郎左衛門」に相談したところ、二人は造酒助に同情し、造酒助にともかく立ち退くことをすすめ、彼が隣家の「幕府勘定奉行松浦猪右衛門」宅に逃げ込むことを黙認した。造酒助は二日間かくまわれたのち、叔父の唐津藩士「近藤源太兵衛」の長屋に隠れた。

しかし、叔父は他藩とのトラブルを避けるため、当時浪人中で江戸本郷に住む兄、「近藤宇右衛門」に託すが、家が狭く、世間をはばかり、上野持恵院住職の斡旋で、「堀田筑前守正俊」のもとに小姓として仕え、名も「近藤一学」とあらためた。

一方、主君山名矩豊は、目付二人の専断に激怒し、造酒助を討ち取らねば帰参許さじと長の暇を命じる。思わぬ成り行きから、二人は慌てて宇右衛門に造酒助の引き渡しを求めるが拒否される。思いあまつた二人は、このうちは宇右衛門を討つしかなしとして、延宝元年五月十六日、宇右衛門が駕籠に乗るところをつけた上で引きずり出し、なおも造酒助の所在を明かさぬ宇右衛門を殺害してしまう。

宇右衛門の弟、近藤源太兵衛は、二人の仕業であることを知り、兄の敵討ちを誓う。

元はと言えば、自らが原因と造酒助は敵討ちに加わるため、堀田正俊へ暇を願い出るが許されず、松浦猪右衛門の仲介によ

つてようやく許され、元服して三度名を変え、「坂尾武兵衛」として敵討ちの一行に加わった。

仇である浅田、池田の二人の目付は宇右衛門を討ったことで帰参が叶い、江戸から但馬村岡へ帰される。

近藤源太兵衛は、総勢二十五名で村岡領へと乗り込むために、延宝三（一六七五）年八月江戸を發つ。そして、浅田、池田の宅を見つけ、寝込みを襲おうとしたが失敗し、かえって警戒を強められる。

源太兵衛、武兵衛は京に潜伏し、家来たちは村岡付近で商人に身をやつして機会を待ち続ける。その間に総勢七人に減ったものの、前回の敵討ち未遂より八年後の天和二（一六八二）年四月二十日、ようやく、再び敵討ちのため万全を期して、京を發ち、二十八日に鳥取に到着。いよいよ村岡に攻め入ろうとする。

ところが、源太兵衛のいとこ「丹羽重兵衛」が急に発病し、仕方なく、翌日岩井温泉（鳥取県岩美町岩井）の温泉宿に預けて出立しようとした。しかし、当時、由井正雪の殘党「小山田弥一郎」の探索が続いており、宿屋の主人から、湯治にしては荷物が多い上に、見かけの割に重かった（戦闘時の鉢金、鎖帷子等武器が隠されていた）上、東本願寺の寺侍と名乗るわりには京なまりがなく、ひどく怪しまれ、大庄屋彦三郎にまで吟味され、足止めされる。

ようやく詮議を逃れ、途中で足手まといの「丹羽重兵衛」を始末するなどして、村岡までやって来るが、夕刻となつてしまふ。それでも二手に分かれ、「浅田重郎兵衛」と「池田七郎左衛門」の両家に夜討ちをかけ、闇の中で激闘の末、「池田七郎左衛門」は武兵衛討ち果たすが、「浅田重郎兵衛」は逃れ、弟「浅田強右衛門」の右腕を切り落とすにどまる（「浅田重郎兵衛」は自宅の風呂釜に隠れていた）。

今度は逆に二十人ばかりの追手がかり、一行の「山田又市」が一人残り殿として戦い自害、残る五人は逃げ、岩美町までたどり着くが、偶然ここで、岩井温泉の大庄屋彦三郎と巡回中の鳥取藩の郡奉行に出くわしてしまう。

仕方なく、敵討ちの経緯をすべて白状したところ、鳥取藩兵約五十人ばかりが迎え、追手から守り、鳥取へと護送した。ここで一行は吟味を受け、それぞれ口述書をしたためた。その写しが、村岡の現当主（池田四朗氏）の家に残る『村岡記』である。鳥取藩では一行の敵討ち成功と艱難辛苦の追跡ぶりに感動し、源太兵衛に白銀十枚、衣類などを贈り、唐津藩に帰りたいという希望を叶え。五月十日、米子まで陸上護送し、そこから唐津まで舟で送った。一行が鳥取城下を去った日、村岡藩から役人など五十人ほど駆けつけ、一行の引き渡しを求めたが、諦めざるを得なかった。『但馬史4』より森田要約の

傍線部に示したが「宇右衛門」「浅田」という名を用いていることや、敵討ちの主役が源太兵衛と若い武兵衛であったり、敵討ちに一度は失敗し再び数年探索したり、敵討ちを目前に急病になったり、敵討ち未遂で腕を切り落したり、敵討ちを土産に帰藩するなど、時系列は違えど断片的に『武道伝来記』巻三の二を想起させる要素は多い。何よりも出石と村岡とは同じ但馬で近い。鳥取藩や唐津藩、時の権力者老中堀田正俊や勘定奉行まで巻き込んだ上、江戸、但馬、因幡、唐津と展開した敵討ちは、太平の世の語り草として、「村岡騒動」とも呼ぶべき、当時の人々の耳目を驚かせた事件ではなかつたであらうか。それを村岡から出石に辛うじて舞台をずらしたところで、『武道伝来記』巻三の二を村岡の敵討ちの際物語と断定してほぼ間違いないのではなからうか。

五、棕梨一雪『日本武士鑑』と『村岡記』

そうなると、諸先輩方、先学がなぜ、この関係を論じなかつたかという疑問が生じる。

一つにして最大の要因は、本話前半と章題から「化物屋敷」の怪異現象の解明に興味注がれたためである。一例をあげると、

■『古今著聞集』巻十七の後鳥羽院の狸退治譚と大納言泰道の五条坊門高倉の帝の狐退治を重ね合わせたもの。↓後藤興善氏「古今著聞集」と西鶴の説話」『西鶴研究』二号・一九四二年十二月刊。

■古狐の怪については『古今著聞集』巻十七「変化」の中の斎藤左衛門尉助康の話（他に類話として『狗張子』『蜘蛛塚の事』『曾呂利物語』『よろづのもの年をへて必ず化くる事』『法苑珠林』など）が最も似ている。↓吉江久彌「趣向転用の一様相」『西鶴文学研究』（笠間書院）一九七四年刊。

■『古今著聞集』巻十七の話に類似し、『太平記』剣巻、同二十三の大森彦七の話などが西鶴の意識の中にあつた可能性が考え

られるが、直接の典拠は『新伽婢子』巻二「古屋剛」か。↓谷協理史・他『新日本古典文学大系77 武道伝来記』（岩波書店）一九八八年刊。

のように論争は尽きない。

しかし、後半部に着目された論もある。椋梨一雪『諸国敵討 日本武士鑑』「五卷五冊。元禄九（二六九六）年刊。内題『古今武士鑑』」巻二の七にも「村岡」の敵討ちを素材とした「近藤源太兵衛、兄敵討」がある。しかし、かつて、小谷省三氏「西鶴武家物の素材」⁽⁸⁾において、『武道伝来記』巻三の一が村岡に近い宮津藩を舞台としていることからその典拠としたため、先行研究も、巻三の二との関係に着目してこなかったという経緯がある。

ところで、その椋梨一雪『日本武士鑑』序文の西鶴『武道伝来記』批判は周知のことである。

爰に、近年、武道伝来記と名付て、世に弘むるあり。之を窺い見るに、一として実なることなし。猥りがはしき虚妄の説のみなれば、人の教になるべき物にしも非ず。⁽⁹⁾

作者「椋梨一雪」（二六三二～一七〇九頃）について最も明解な「加藤定彦」氏の項目解説をひく。

江戸前期の俳人、説話（実録）作者。本貫は安芸国（広島県）椋梨村で、出生地は京都。通称を椋梨三郎兵衛という。一雪は「かずゆき」とも。別号富士丸、隠山、牛露軒、柳風庵。松永貞徳に俳諧を学び、山本西武に従って俳諧師となる。俳諧の作品よりも、『正章千句』（二六四八）を批判した『茶杓竹』（二六六三）以下の論争や、『日本武士鑑』（二六九六）の序文で井原西鶴を批判したことで名を知られる。また、天和（二六八一～八四）年ごろ難波に移ってから著した『古今犬著聞集』『犬著聞集拔書』『続著聞集』（『新著聞集』は改編本）は、近世説話の源流をなすものとされる。

つまり、松永貞徳の後継と称していた貞室の『正章千句』を北村季吟とともに非難したほどの貞門派である。大坂談林俳諧の旗手であった西鶴に対しては常に批判的であったであろう。さらに近世説話という巷説の収集という点においてもライバルと見なしてよいであろう。『日本武士鑑』自序には「難波之隠士」と名乗っていることから難波に住む西鶴との関係は難しかったであろう。

さて、『日本武士鑑』巻二の七「近藤源太兵衛、兄敵討 付坂尾夫太夫事」の梗概は以下である。

江戸にて、山名家の兄小姓坂尾造酒之介が、仲間の兄小姓と「喧嘩仕、相手を斬殺せし」を横目浅田十郎兵衛、池田七郎左衛門兩人の才覚で、造酒之介の親の知人、松平和泉守（肥前唐津藩松平乗久）の家臣近藤源太兵衛の家に忍ばせたが、家中への遠慮から、浪人中の兄近藤宇右衛門に預ける。しかし、宇右衛門宅も狭いため、上野の珠善院の斡旋で、「堀田筑前守」のもとに小姓として仕えた。ところが、その二年後、浅田、池田の謀が主君に聞こえ、兩名に坂尾造酒之介を討ち取らねば帰参叶わぬ旨の主命が発せられ、兩名は近藤宇右衛門に訊ねるものの口固く、宇右衛門を斬って、主君に報告する。兩名は村岡に戻され、警備を固めた。近藤源太兵衛は兄の敵討ちのため、暇乞いをした。坂尾夫太夫（坂尾造酒之介）もこれに加わり、一行二十五人は村岡へ向かい、村岡近くの妙見山に籠もる。夜討ちをかけようと計画していると、百姓たちが年貢を運ぶ多数の松明の灯りを気取られたと勘違いして、そのまま引き退いてしまう。その後、機会を窺って三年、天和二年四月二十九日、但馬出石郡湯本庄屋喜平次方に宿をとり、五月二日の夜に突入しようとするが、一行の丹羽十郎兵衛が長年の病の悪化で足手まといとなることを嘆くため、殺害、敵討ちを挙行する。激闘の中、坂尾夫太夫が池田七郎左衛門を討つ。夫太夫は取り纏る七郎左衛門の妻も乳母など数人を斬り捨て、源太兵衛とともに立ち退く。手傷を負った山田又市が自害の後、二十人の討手に追われ、馬に乗って逃げ延び、再び喜平次方に一晚中立て籠もり、鳥取藩へ忠進。生き残り五名は騎馬二十騎、足軽三十人、雑兵百五十人に迎えられ、鳥取まで護送される。翌五日、浅田十郎兵衛以下村岡藩より討手七、八十人ほど来るが、鳥取藩へ引

き取られたことを聞き、虚しく帰る。一行は鳥取に六、七日滞在後、騎馬以下多数に護られて、米子より舟で唐津に送られる。暫くして、村岡藩から使者があり、一行を引き渡しの上、妻子を殺された浅田十郎兵衛は元氣であるから、源太兵衛と再び勝負させて欲しいとの要求があるが鳥取藩は白をきり、追り返す。(最後に鳥取から米子まで護送した主な人名と鳥取藩が一行に与えた褒美の品が鎗一筋、刀一振であったことを記している。)

『村岡記』と『日本武士鑑』と比べれば、村岡騷動の実態が大筋ではほぼ同じであることに気づく。もちろん、敵討ち話としての完成度は後者が優れていることは言うまでもない。しかし、『村岡記』の方が仇が卑怯にも風呂釜に隠れたり、敵討ちの成功に感動した鳥取藩から白銀十枚の褒美をもらったなど人間臭さが感じられる。加えて『村岡記』には、梗概には省略したが、源太兵衛が敵討ちの後、追っ手をかけられているときに偶然会った鳥取藩の役人に、鳥取藩の重役と知り合いだと言って逃げおせよとした小細工や敵討ちに感動してしまった鳥取藩が積極的に行を匿ってくれた経緯が細かく書かれている。敵方とも言える『村岡記』にどのように口述書の写しが持たされたのか不明であり、その史料性を否定したとしても、『日本武士鑑』を通して、村岡騷動がかなり正確な口碑として巷間に知られていたことを示している。

ところで『日本武士鑑』巻二の六「大坂御堂前、敵討事」は、前述した西鶴『武家義理物語』巻二の一、続く巻二の二と同一の徳島藩で起こった事件を素材としている。この事件の発端について、西鶴が暴雨のために橋の上で傘と傘が当たったことによる言葉咎めから起こった不慮の事故とするのに対し、『日本武士鑑』は傘の言葉咎めに過日の相撲の勝敗を遺恨として絡めている。

これは一雪が『武道伝来記』が「一として実なることなし」と批判した根拠を示す、「虚」の西鶴「諸国敵討」に対する「真」の「諸国敵討」の提示かも知れないが、逆にその一雪もまた西鶴作品の読者であったことを公言したと

も言える。つまり、村岡騒動の真実をあげるということは、西鶴「諸国敵討」の中に村岡の敵討ち話を読み取ったからではあるまいか。それが『武道伝来記』巻三の二「按摩とらする化物屋敷」ではないかとするのがここでの論証である。

六、おわりに

右からは、棕梨一雪が『武道伝来記』に対抗して『日本武士鑑』を書き、真実の敵討ち話を提出した、そう見るのが妥当であろう。しかし、もし西鶴と一雪とに親しい風交があれば情報提供協力者となる。特に右の大坂御堂前の敵討ち話の場合、一雪の兄が徳島藩医成田清閑⁽⁴⁾であり、敵討ちがあつた時期、大坂在住であつた以上、すぐれて正確な情報を持つていたかも知れない。ただ、『四国猿』(元禄四(一六九二)年刊。律友編)があるように、西鶴と徳島談林俳壇との結びつきも深く、こちらからの可能性も高い。

そう考えると、村岡騒動も地方談林俳人からの聞書の可能性はないであろうか。

出石の俳人と言えば、「駒角」こと大名俳人として知られる「京極高住」である。万治三年、丹後田辺城主京極飛騨守高直の四男として生まれ、延宝二年三月より豊岡城主となった。「元禄五年正月」に、その京極高住に召されて百韻を卷いた俳人が「豊前日田」の「西国」である。「西国」は、「西鶴」の地方談林における最もすぐれた弟子であつたが、西鶴亡き後、江戸座蕉門とも親しく交わり、再三、「駒角」とも同座している。

「駒角」と「西国」の風交が、それ以前からのものとするなら、「村岡」の敵討ちは、情報元を「西国」と「駒角」とすることとなり、『武道伝来記』を通した地方談林への「挨拶」としてのものではないか。つまり、第一舞台「豊前」は「豊前」の俳人たちへの「挨拶」、第二舞台「松山」「今治」は「伊予」の俳人たちへの「挨拶」、第三舞台

「出石」は「但馬」の俳人たちへの「挨拶」という手法も想定できるのである。

ただ、出石俳壇の「駒角」と「西国」の風交は、「西国」が元禄四年、先の豊前日田永山城主「松平大和守直矩」を慕って東下⁽¹⁾してからと見るべきである。むしろ、「駒角」は先に「盲目」と号しており⁽²⁾、鈴木清風編『稲筵』（貞享二年）、一瀬調実編『白根嶽』（貞享二年）に入句⁽³⁾しており、他の談林俳人からのルートの可能性を探れば、この周辺からも指摘できるであろう。

その「駒角」同座の中で、あえて出石俳壇との関わりをあげれば、「池西言水」があがる。「駒角」の句は言水編『前後園』（元禄二年）、言水編『都曲』（元禄三年）にも入句⁽⁴⁾しており、その親密さがわかる⁽⁵⁾。気になるのは、その二集ともに「駒角」以外に「丹州出石蘆田 可雪」「但州妙見山 焉求」という名があることである。前者は但馬出石に「葦田兵主神社」があることから「丹州」は間違いで「但州」とすべきである。後者「妙見山」はまさしく村岡騷動の際に一行が立て籠もった場所である。ともに村岡騷動を知る出石俳人ではあるまいか。さすれば、出石俳壇への「挨拶」となる。元禄期の出石俳壇のさらなる精査を今後の課題として、結びとしたい。

注(1) 『井原西鶴』（国文学研究叢書）至文堂 一九二六年刊

(2) 『西鶴 評論と研究 上』中央公論社 一九四八年刊

(3) 『西鶴文学における武家』『国文学』二一六 一九五七年刊

(4) 横山重・前田金五郎校注『武道伝来記』岩波文庫 一九六六年刊

(5) 富士昭雄・広嶋進校注『井原西鶴集4』小学館 二〇〇〇年刊

(6) 拙稿『「武道伝来記」と江島為信―西鶴から伊予俳人への「挨拶」―』『俳文学報』第四十八号 大阪俳文学研究会 二〇一四年刊

- (7) 宿南保「村岡かたきうち物語」『但馬史4』のじぎく文庫 一九七三年刊
- (8) 『国文学』第二十一号 関西大学国文学会、一九五八年四月刊
- (9) 関西学院大学図書館所蔵『日本武士鑑』より森田翻刻。旧字等適宜改訂。句読点を補った。
- (10) 井上敏幸氏「一雪」担当項で指摘。『俳文学大辞典』角川書店
- (11) 大内初夫「翻刻『豊西俳諧古哲伝草稿』」『近世の俳諧と俳壇と』和泉書院 一九九四年刊
- (12) 白石悌三「大名たちの俳諧 但馬豊岡城主 京極高住」『江戸俳諧史論考』九州大学出版会 二〇〇一年刊
- (13) 雲英末雄監修『元禄時代俳人大観』第一巻 八木書店 二〇一一年刊
- (14) 注(13)に同じ。
- (15) 「言水」が「京極高住」の庇護を受けていたことは、宇城由文氏の「元禄前夜の京俳壇―三月物を中心として―」(『国文学論叢』二九 一九八四年刊)や雲英末雄氏の「元禄京都俳壇と地方俳人」(『元禄京都俳壇研究』勉誠社 一九八五年刊)ですでに指摘されている。

※本書の『武道伝来記』の本文は「富士昭雄・広嶋進校注『井原西鶴集4』小学館 二〇〇〇年刊」を用いた。

本稿は第五十一回日本文芸学会(於四国学院大 二〇一四・六・九)における「挨拶」としての『武道伝来記』の成立―西鶴と四国談林俳諧文化圏との交流―を基にしている。

なお、本研究は文部科学省科研基盤研究(C)課題番号「[4520252]」(森田雅也代表)「地方談林俳諧文化圏の発展と消長―西鶴の諸国話的方法との関係から―」の研究助成を受けている。

(関西学院大学文学部教授)